

## 「生活記録と〈運動〉2」趣旨説明 —50年代文化運動の中の生活記録運動の位置

水溜 真由美

ここに収録するのは、2014年8月30・31日に北海道大学で行われた第八回戦後文化運動合同研究会の第一セッション「生活記録と〈運動〉2」の記録である。本セッションは、昨年行われた第七回合同研究会の第一セッション「生活記録と〈運動〉」のいわば続編にあたる。

第七回研究会の「生活記録と〈運動〉」では、司会の中谷いずみ氏による基調提起の後で、榊原理智氏による「記号論から生活記録運動へ—『思想の科学』の跳躍」、東村岳史氏による「被爆(者)体験と生活記録」の報告が行われた。コメンテーターは、辻智子氏、道場親信氏が務めた。

生活記録運動は、50年代の文化運動の中でも特にユニークな性格を持つ運動の一つである。だが、戦後文化運動合同研究会において生活記録運動が報告やセッションのメインテーマとして取り上げられたのは第七回研究会が初めてである。ついでに述べるならば、生活記録運動の中心的な担い手は女性であるが、過去の研究会において、女性・ジェンダーに焦点を合わせた研究報告は『サークル村』関連のものに偏っていたように思う。

なお、今年の報告をふり返ると、榊氏は、鶴見俊輔を中心に初期の『思想の科学』の展開をたどり、『思想の科学』が生活記録運動に何を期待したのかを考察された。また、東村氏は、長崎における被爆体験をめぐる記録活動を取り上げて生活記録運動の継承という観点から検討された。いずれも、生活記録運動の背景や広がりをも再考させるユニークな報告だったが、50年代の生活記録運動そのものを扱ったものではない。その意味でも、本セッションにおいて、生活記録運動が正面から扱われることには大きな意義があると思う。

本セッションの報告者と報告タイトルは、以下のとおりである<sup>1</sup>。

辻智子「紡績女子労働者の生活記録運動—記録創出の過程とサークル集団の動態に注目して」

猿山隆子「『生活をつづる会』における書くこと・話し合うこと——鶴見和子ノートを手がかりに」

岸伸子「王子製紙争議記録《幻灯》にみる王子主婦連一会誌『主婦の窓』へ込めたもの」

3件の報告のうち、辻氏には東亜紡織泊工場の女子労働者による「生活を記録する会」の活動について、猿山氏には鶴見和子が主導した東京の主婦による「生活をつづる会」の活動について報告していただく。生活を記録する会と生活をつづる会は、50年代に生活記録運動を行った代表的なグループとして知られている。岸氏の報告は、生活記録運動ではなく、王子製紙争議の過程で開始された労働者の妻による文集づくりの活動に関するものである。なお、二日目の第二セッションでは、清原悠氏が「50年代の女性誌市場と〈誌上の闘争〉」というタイトルで、朝日新聞の「ひととき」欄の投稿者・読者によって組織された草の実会について報告される。つまり、本研究会では、生活記録運動を中心として、女性を担い手とする「書く」ことをめぐる集団活動について4件の事例報告が行われることになる。各事例の共通点や相異点について比較しつつ、考察を深める機会になればと考える。

なお、本セッションの報告とコメントは、いずれも教育学、歴史学の研究者にお願いすることとなった。戦後文化運動に関する研究は、これまでも領域横断的に行われてきたが、文学、社会学、思想史などの分野が中心で、教育学や歴史学の分野の研究者の参加は少なかったように思う。本セッションが、より多様かつ開かれた視座の下で戦

<sup>1</sup> コメンテーターは、富永貴公氏、和田直樹氏が務めた。また、岸氏の報告の前に、鷺谷花氏による、王子製紙争議記録『協約改悪反対斗争記録 団結がんばろう』（紙パ労連王子製紙労組、1958年）の幻灯上映が行われた。な

お、鶴見和子が遺した「生活をつづる会」の記録ノートをもとに、会の中での「つづり方」をめぐる話し合いを丹念に追った猿山報告は、たいへん残念なことながら、諸事情により今回掲載することができなかった。

後文化運動をめぐる研究を進めていくきっかけになればと思う。

ところで、生活記録運動とは何だろうか。西川祐子は、「鶴見和子文庫をひらいて—シンポジウム要旨説明」において、生活綴方を、「個々人が生活のありのままを自分の言葉で綴り、それをたがいに読み、語ることによって共通の問題を発見し、その問題のよってきたる社会の仕組みまでを見抜く、見抜くだけではなくて自らも責任のあるこの社会の仕組みを変えたい、という運動でありました。／書く・読む・語るがいわばその中心でした」と定義している<sup>2</sup>。なお、ここで西川は、「生活綴方」という言葉を大人を担い手とする生活記録運動も含むものとして用いている。

生活記録運動の実態については、辻氏、猿山氏の報告の中で詳しい検討がなされることと思うので、ここでは生活記録運動を、50年代の文化運動のコンテクストの中に位置づけておきたいと思う。生活記録運動は、次に述べるような意味で50年代の文化運動の特徴を集約するような運動であった。

第一に、「書く」ことを中心とする運動であった点である。「書く」ことは、文学サークルを始めとして、50年代の文化運動が特に力を入れた活動である。近年の研究においても、特にサークル誌の収集や復刻に関して大きな成果が上げられている。生活記録運動の検討を通じて、当時の人々が「書く」ことに強いこだわりを示したことの意味を考えたい。

第二に、集団による活動であった点である。先ほどの西川祐子の定義に見られるように、生活記録運動は「書く・読む・語る」のプロセスからなる運動であったが、これら一連の活動は集団を通じて行われた。生活記録運動において「書く」ことは、密室の中でなされる孤独な作業ではなく、一種の集団創造であった。文化活動がジャンルを問わず集団によって担われ、また集団による創作活動の意義が強く意識されていた点は、50年代の文化運動の大きな特徴である。

第三に、社会変革の意識を伴っていた点である。生活記録運動は、私生活や身の回りの出来事を「女・子供の目線」で捉えることに力点をおく運動だったが、身近な問題に目を向けることは、社会について批判的な視座を獲得し、社会を変革することと不可分であると考えられた。こうした社会変革の意識は、革新運動の一翼を担った50年代の文化運動に広く見られるものである。

第四に、名称が示すように、「記録」を目的とする運動だった点である。先述したように、生活記録運動において、記録の中心の対象は私生活や身の回りの出来事であったが、身近な事柄を記録することは自己や社会を変えることに結びつく行為であると考えられた。50年代の文化運動における「記録」の重要性、「記録」と「闘い」の結びつきについては、鳥羽耕史『1950年代—「記録」の時代』（河出書房、2010年）の中で詳しく論じられているとおりである。

第五に、ネットワークの重要性である。周知のように、生活記録運動は生活綴方運動の示唆を受けながら各地に広がった<sup>3</sup>。50年代の多くの文化運動と同様に、生活記録運動も自然発生的な運動でありながら、様々なグループや知識人との結びつきの中で展開された。他方で、生活をつづる会では、グループ内に小グループが形成され、会としてのネットワークを維持しつつ小グループ毎の活動が行われた<sup>4</sup>。顔の見える規模の小集団が横断的に結びつく運動のスタイルは、二日目の清原氏の報告で扱われる草の実の会とも共通している。

これまで述べてきたように、生活記録運動は50年代の文化運動を集約するような運動であったが、当然ながら固有の特徴もあった。ここでは、生活記録運動の中心の担い手が女性であったこ

<sup>3</sup> 特に、無着成恭編『山びこ学校』の出版と1952年8月における第一回作文教育全国協議会の開催は、生活綴方運動が発展する重要な契機となった。西川祐子「「生活綴方」と「生活記録」の出会い——1952年8月、中津川」前掲西川・杉本編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ——鶴見和子文庫との対話・未来への通信』参照。

<sup>4</sup> 猿山隆子「鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展開——「生活をつづる会」における話し合いの記録ノート」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第57号、2011年。

<sup>2</sup> 西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ——鶴見和子文庫との対話・未来への通信』日本図書センター、2009年、8頁。

とに目を向けてみたい。

50年代の革新運動・文化運動には多数の女性が参加した。特に、サークルを始めとするインフォーマル・グループは、男性中心の政党、労働組合などの既成組織に比べて女性にとって敷居が低い組織であったと推測される。また、母親大会や杉並区の主婦が開始した原水禁署名運動など、特に平和運動において女性が重要な役割を果たしたことが知られている。

ただし、生活記録運動はほぼ女性に特化した運動であった点で、50年代の文化運動の中でも特異であった。生活記録運動の担い手が女性に偏っていた理由はどこにあるのだろうか。

まず、性分業が強固であった50年代において、身近な場で集団を組織しようとすれば自ずと性別の偏りが生まれる状況にあったことが指摘できる。通常サークルは、地域や職場の人間関係を基盤として組織されたが、職場ではジェンダーによる職種、職域の大きな偏りが見られた。また、地域においても、少なくとも既婚者については、男性と女性の生活圏は大きく異なっていた。そもそも家庭責任を持つ主婦と男性を中心とする労働者とは、サークル活動に参加できる時間帯に大きなズレがあったであろう。

また、私生活や身の回りの出来事に焦点を合わせた生活記録運動は、私的領域に位置づけられていた女性にとって、より身近で魅力の感じられる活動であったように思われる（加えて、文学、芸術などの文化活動から疎外される傾向にあった女性にとっては、既存の「文化」の周縁に位置づけられていた生活綴方は、相対的にアプローチしやすいジャンルであったとも推測される）。さらに、生活記録運動は、その性質上、状況や問題関心、ものの考え方を共有する同質的な集団の中でなければうまく機能しない運動だったのではないだろうか。当時、女性と男性をとりまく状況はあまりにも違っており、女性が男性と身近な問題について「本音」で語りあったとしても、共感できる点は限られていたように思う。

これらの点をふまえると、生活記録運動はウーマン・リブと多くの共通点を持っていたことに改めて気づかされる。ウーマン・リブにおいても、女性たちは地域を拠点として少人数のグループを

組織し、プライベートな事柄について語り、問題を共有し、意識変革を図った。しかも、「私的なことは政治的である」というスローガンが示すように、リブに集った女性たちはプライベートな事柄が政治性を帯び、社会構造と連動していることについて意識的であった。また、多くのリブ・グループがミニコミを発行した。リブは、女性を担い手とする「書く」運動でもあった。

生活記録運動は、様々な点でリブと共通点を持つ活動であった一方で、性役割・性分業については必ずしも批判的ではなかった。もちろん、これは性役割・性分業からの自由が生活記録運動の中心的な問題関心とならなかったということであり、生活記録運動の中で女性であることに根ざす困難が様々な形で提起された可能性を否定するものではない<sup>5</sup>。

ともあれ、この点では同時代の九州で活動を行った女性サークル、『無名通信』のユニークさが際立っている。周知のように、『無名通信』創刊宣言において、森崎和江は女性の他者化を批判し「無名にかえる」ことを提唱した（「わたしたちは女にかぶせられている呼び名を返上します。無名にかえりたいのです。なぜなら、わたしたちはさまざまな名で呼ばれていますから。母・妻・主婦・婦人・娘・処女……と」）。森崎の先鋭的な問題意識の下で、『無名通信』誌上では、家事労働、母性、労働運動における男性中心主義などの問題が繰り返し取り上げられた<sup>6</sup>。

他方で、『無名通信』と生活記録運動の間には極めて多くの共通点がある。『無名通信』も女性たちによる「書く」ことをめぐる運動だったが、掲載作品は、小説・詩・短歌などの「文学作品」よりも、身の回りの問題を取り上げたエッセイ的な文章が圧倒的に多い。また、『無名通信』には、女性の問題をめぐる討論の記録も繰り返し掲載されている（『無名通信』は、「書く」以上に「話す」運動であったと言えるかもしれない）。『無

<sup>5</sup> たとえば、東亜紡織泊工場の女子労働者による『母の歴史』には、伝統的な女性の役割や母と娘の関係を批判的に捉える視点が明確に認められる。木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出書房、1954年参照。

<sup>6</sup> 『無名通信』については、拙著『『サークル村』と森崎和江—交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版、2013年、第3章第2節を参照。

## 22 「生活記録と〈運動〉2」趣旨説明

『無名通信』は、生活記録運動と同様に、それまで文学や芸術から排除され、書くことさえままならなかった女性の肉声をすくい上げることに力点をおいた運動であった。

50年代において、生活記録運動と『無名通信』は共に、サークル運動の中で周縁化される傾向のあった女性の受け皿として機能した。『無名通信』が『サークル村』と並行して組織されたことと、生活記録運動が女性に特化した運動であったことは深い部分で結びついているように思われる。

(みずたまり まゆみ・北海道大学)